



2007年12月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2007年12月
第 65 号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（4）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（61）（山内 薫）	5
一 言 （岡田健嗣）	7
村田先生の天津講演から	11
見果てぬ夢を（8）（山本優子）	13
「東京漢点字羽化の会」第23、24回例会報告並びに 第7、8回「学習会報告」とわたくしごと（木村多恵子）...	18
漢点字訳書のご紹介『神様がくれた漢字たち』	23
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト（初級編・第6回）	28
ご報告とご案内	29
編集後記 （木下和久）	31

漢点字の散歩 (四)

岡田 健嗣



三 どうして? (承前)

ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ

(I)

一八二五年、フランス人のルイ・ブライユ(一八〇九〜一八五二)は、多くの困難を乗り越えて、盲人のための触読文字を完成した。そこにはアルファベットだけでなく、句読符号や数字も揃っていて、それを指先に触れるだけで読み分けることのできるものであった。このブライユの触読文字の体系は、一九世紀の内に世界の隅々まで広がって行った。そしてそれは、あらゆる言語の、盲人のための触読文字の開発の気運を呼び動かし、どこでもこの触読文字の体系に沿って、その地域の言語に見合った文字が作られて行ったのである。

ドイツではシュトレール博士が、一九二五年に「ブライユ方式の総綴りによる基本書式」を世に問われた。それが今日一般に使用されている「マールブルク

体系」の基となったものである。一九七一年にウィーンで開催された「ドイツ語略字書式改訂作業部会」の検討の中から、ドイツ語点字の基本書式にも標準化が要請されて、この新版「マールブルク方式による盲人用書式」が刊行される運びとなったのである。ここでは、総綴りの規則とその働きの枠組みを、改めて提示している。この点字システムは、言うまでもなく標準的な国際点字に沿うよう留意が計られた。と言うのもこの改訂では、句読符号やアポストロフには小さな変更を加えることになったが、ドイツ語固有の発音の表記は従来通りとし、その他は変更しなかったからである。

この手引き書を送り出すに当たって重要と考えたのは、その構成をシステムティックに組み上げることと、ドイツ語の総綴りの特徴を豊富に例示することによって、独力でこの表記法を学習し易くすることであった。このような試みから私たちの得たことは、ドイツ語の表記の本質に迫ることができたことである。それがこの手引き書の墨字版・点字版両者の編集の作業に関わった成果だと言っても過言ではない。

(後略)

(Leitfaden der Deutschen BLINDENVOLLSCHRIFT
1977 Deutschen Blindenstudienanstalt)

$$(II)$$

カール・シュトレール博士の起草になる「ドイツ語点字略字使用法の手引き」が、「マールブルク体系」として、ブリンデン・シュトゥディーエン・アンシュタルトウから刊行されて、ちょうど五〇年になる。その二五年後の一九四八年には、その第二版が改版された。さらにそれから二五年を経た後、マールブルクのブリンデン・シュトゥディーエン・アンシュタルトウでは、「ドイツ語点字略字書式法改訂協同部会」の一年に余る協議の成果として、この「ドイツ語点字略字書式法の手引き」を世に問うこととなった。この作業部会には、ドイツ語圏諸国であるドイツ連邦共和国、ドイツ民主共和国、オーストリアおよびスイスの四カ国から、それぞれ委員が参加した。この改訂がもたらした成果は、点字による表記法をより単純にできたことと、その規則に対する例外を少なくできたことである。またこの協議では、この略字法が、語彙や語法の変化にうまく適合し得ることと、コンピュータで行われる変換のように、他のデータとの互換性を確保し得ることを、充分考慮した。それゆえにシュトレール博士の手引き書の基本の部分にも、改訂を加えることになった。

手引き書には、整った規則で書式を紹介することや、多様な事例で説明したり、また独習だけで充分習得可能な教本であることが求められているが、本書はその前に、ドイツ語点字の略字のまとまった使用法を提示して、視覚障害者諸氏が読み書きする際に、座右に置いて役立てられるようにと工夫した。

ウィーソンの「協同作業部会」では、会議を終えるに当たつて、この改訂された略字書式の有効期間を論議した。そして必要に応じて、発表後一定年月を経た後に、再検討することを確認した。従つてこの後、諸氏がご使用されることで、この書式法の不足・不備を発見されることもあるはずである。そんなときは、是非とも当方までお知らせいただきたいと願つてゐる。

(後略)

(Leitfaden der Deutschen BLINDENKURZSCHRIFT
1972 Deutschen Blindenstudienanstalt)

𐤀
 𐤁
 𐤂
 𐤃
 𐤄
 𐤅
 𐤆
 𐤇
 𐤈
 𐤉
 𐤊
 𐤋
 𐤌
 𐤍
 𐤎

右は「ドイツ語点字基本書式」(Ⅰ)と「ドイツ語点字略字法」(Ⅱ)両書の序文の拙訳である。私が漢点字に出会う少し前に手にした本である。

前号でも述べた通り、私たち視覚障害者も学校で英語を学んだ。その折りに、不十分ではあるが英語の点

字には「略字」という文字があることを知る。不十分というのは、盲学校の中学部・高等部の先生方で、点字に通曉する方は極めて少なく、生徒は独学で学ばなければならぬことと、現在の事情は分らないが、当時はしっかりした解説書がなかったことによる。

しかし略字を勉強しているうちに分かつて来たことがある。英米の点字の關係者が、当然と言えば当然至極であるが、英語の構造を熟知しておられることである。表記の規則が簡明で、例外というものがない。そして何故に英語点字に「略字」が開発されたかである。

英文を点訳するとき、全てをフルスペリングで表されると、大変読み難いのである。音読ができない。略字を使うとどうか、極めて快適に読めるようになる。このことは略字を習得した者誰でもが感じることである。略字が使用された文章は、ほぼ音読に相当するかそれ以上の速度で触読できるのである。

それはどうしてか(？)、少し英語点字の略字の構造について述べてみる。

点字は立て三点・横二列の六つの点が基本構成である。日本語ではその単位を「マス」と呼んでいる。英

語ではcell、ドイツ語ではFormである。点字は指に触れるとき、この一マスを単位として読みとられる。触読する指は常に移動していて、手前のマス、次のマス、さらに次のマスと、移動しながら比較し把握するのである。

英語点字の略字は、大きく二つに大別される。その一は綴り字を表す略字で、日本語では「略字、略語」と呼ばれている。もう一つはアルファベットや綴り字を表す略字を組み合わせて作られたもので、日本語では「縮字、縮語」と呼ばれている。

綴り字を表す略字の構成は、『ch, gh, sh, th, wh, st』を表す六つの点字符号を除いては、一つの音節を表すものである。母音が前に来るか後ろに来るかとはともかく、母音と子音の組み合わせから成っているが、このことが英語点字の略字の特徴と言えるのである。さらに言えば、母音を含まない六つの略字も、アルファベットが六つ増えたと理解できるものである。これはドイツ語の表記で、『sz』を一つの文字(英文タイプライターでは『B』で代用する)で表すのに比較し得る。

「縮字・縮語」と呼ばれる略字は、単語を構成するアルファベットや「略字」を、一つ・二つ・三つ…使用して表されるものである。たとえば『a』は『quite』、

『11』は『little』、『br11』は『braille』のようである。

略字を使用した英語点字の文章が何故に読み易いか、この拙文に取り組みながら考えた。単に速度が速いばかりではあるまい。確かに読みの速度は大きな要因に違いない。が、触読は何故遅いのか、速読みでできる方が何故読み易いのか分からない。

音読のプロセスを考えてみると、墨字では先ず目の網膜に映った文字の形態の情報は、知覚神経である視神経を通して視覚中枢に送られる。視覚中枢で形成された視覚像はさらに上位中枢に送られて、文字として認識され解読される。また解読された文字は、言語中枢に送られて相当する音韻に変換される。ついで運動神経を通して声帯・口腔・舌・口唇などに送られて発語される、となる。これだけのプロセスを踏みながらも、普通音読は停滞したり中断したりはしない。

触読はどうであろうか。点字の情報は指先の触覚から知覚神経を通して中枢神経に送られる。触覚の中枢では恐らく触覚の情報として処理されるのであろう。その情報がさらに上位中枢に送られて、「点字」という文字として認識され解読される。さらに言語中枢に送られて、相当する音韻に変換されて、運動神経を通

して発声器官に送られて発語される、のである。

つまり目で見て読もうが、指で触れて読もうが、読むという、しかも声に出して読み上げるというプロセスには、さほどの違いはない。何が違うかと言えば、知覚の受容器と知覚中枢である。「目」という受容器と視神経、そして視覚中枢は、人間の持つ感覚器官の中でも最も大きな処理能力を示す器官である。キャパシティ、アビリティともに大変大きな能力を持つ器官であるし、視覚神経も脳の中枢に直接接続されているのである。

触覚器官は感覚器官としては、欠くことのできない器官である。視覚器官とともに働く場合は、大変特徴のある働きをする。

しかし視覚障害者にとっては、視覚の代替を担って欲しい器官である。が代替をするには、視覚器官の能力に遥かに及ばない。指先の触覚受容器、頸髄を通して脳に至る知覚神経、大脳の触覚野、何れも視覚器官の代替をするには、あまりに機能が違い過ぎる。これを何とか補おうとするのが、英語点字では「略字」の体系作りだったのである。

私たち視覚障害者が点字を使用して英語を学ぶとき、この「略字」の体系が大きな力になってくれた。

それは決して偶然や思い込みではない。アルファベットの綴りをそのまま読むのでは、文字の解読や発語にタイムラグを来す。せめて音読と同程度の速度の処理能力が可能であれば、それはなくなる。そのようにして開発された「略字」の体系の方法は、音節の符号化と単語の短縮であった。

このことは私たち日本の視覚障害者が英語を学ぶに当たって、大変幸運なことでもあった。「略字」を習得することが、そのまま英語の構成を学ぶことになったからである。

私はこの体験から、ドイツ語も同様にして習得できるのではなからうかと考えた。そこで冒頭の二書の解読に挑戦したのである。

ご覧のようにこの二書は、時間的には(Ⅱ)が先に、(Ⅰ)が後に刊行された。がしかし、(Ⅱ)を検討するうちに(Ⅰ)にも手を着けなければならぬことに気付いて、ドイツ語点字の基本から再検討されたものという。つまり(Ⅰ)がしっかり固まっていなければ、(Ⅱ)もなりたないという関係にあるのである。

(続く)

点字から識字までの距離(六一)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

地名と平成大合併

前号の人名と漢字の中で、はじめに取り上げた山内一豊だが、実はこの一〇月、高知に行く用事があり、夜行バスで早朝着いたので早速高知城を見学しに出かけた。そこには、山内一豊の銅像と名馬と妻の銅像があり、それぞれの大きな像の下に説明のプレートがあった。プレートには日本語、英語、中国語、ハングルの四カ国語で解説が書かれている。その内英文の解説には「Yamauchi Katsutoyo」とあったので当地でも「やまうち かつとよ」と表記していることが分かった。

さて今回は地名である。以下が「あけのほし」の記事である。

点字図書や録音図書を作成する際、原本の漢字の読みを調べることを「調査」と呼び、点訳、音訳に欠かせない重要な基礎的な作業になっている。特に前回取り上げた人名や地名などの固有名詞は、分かっているつもりでも辞典類などに当たって正確な読み方を調べなければならぬ。

例えば、私の住む埼玉県の東部に鷺宮町（わしみやまち）という町がある。鳥の鷺とお宮の宮という漢字二文字のこの町の名は「わしみや」だが、この町にある関東最古の大社といわれる神社の名前は「わしのみやじんじや」という。町内の東武鉄道とJRの駅名はいずれも「わしのみや」だが、甲子園に出場したこともある県立高校の名前は「わしみやこうこう」という。従って郵便番号簿では「わしみや」、鉄道時刻表では「わしのみや」と仮名が振ってある。町の歴史的な変遷が二つの読みを許容してきたのだろう。

ところで地名といえば、この三月で一応の収束を見た平成の大合併は多くの自治体名を消失させた。なんと三三三二あった自治体が一八二四にまで減ってしまったのだ。この平成の大合併は図書館にも大きな影響を与えた。今まで全国の自治体の図書館設置率は五四・五%（二〇〇四年四月現在）と、約半数強だったものが、今回の大合併によって六九・九%と七割の自治体に図書館が設置されているということになってしまった。図書館の無かった町村が図書館のある大きな市に併合されることによって全体の設置率が大幅に上昇したわけだが、それでもおよそ一〇〇〇残った町村の半数には未だに図書館がないという状態が続いている。

自治体の大合併は明治、昭和に続いて今回が三回目になる。明治の大合併は明治二一年末に七万一千三百四十四あった町村が市制・町村制の施行によって三九の市と一万五八二〇の町村になり、町村数は五分の一になった。昭和の大合併は昭和二八年の「町村合併促進法」、昭和三十一年の「新市町村建設促進法」施行によって全国一律に町村合併が進められ、九八九八あった市町村数が、約三分の一の三五二六に減少した。そして今回の平成の大合併となった。

今回の合併によって新たに生まれた自治体名が様々な物議を醸している。まず特徴的なのが仮名の地名で「さいたま市」を筆頭に「さぬき市」「おいらせ町」等、読みやすくなりやすいという理由でつけられたのだろう。日本で初めてつけられた仮名の自治体名は「むつ市」（一九六〇年）が初めてだが、今回の合併で初めて日本語以外のカタカナを含む「南アルプス市」が誕生した。新地名の中には「さくら市」（栃木県）や「みどり市」（群馬県）、「中央市」（山梨県）などのように、自治体名からはその市がどこにあるのか全く見当の付かない、イメージ地名と呼ばれる地名も出現している。また「つくば市」と「つくばみらい市」のように隣接して同じような名称を持つ自治体もできた。その最たるものは静岡県県の「伊豆市」と

「伊豆の国市」だろう。おまけに「東伊豆町」「西伊豆町」「南伊豆町」が周辺にあり、伊豆半島の半分が伊豆という地名を含む自治体となつて非常に紛らわしい。さらに岐阜県の「飛騨市」のように旧飛騨の国のおよそ六分の一しかない地域が住民投票によつて「飛騨市」を名乗つてしまったために、周辺地域からクレームが付くというような事態まで生じている。

こうした傾向に対して民俗学者の谷川健一が所長を勤める日本地名研究所が緊急声明を発している。(http://www8.ocn.ne.jp/~timeken/) その声明の趣旨は

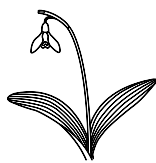
「地名は日本の伝統文化の根幹をなすものであり、日本の歴史・地理・民俗・考古などすべては地名を由縁としている。安易な命名は、あるいはいたずらにひらがな書きにし、または安易に方位方向を冠し、あるいは合併市町村の頭文字をとつて合成し、あるいは根拠のない瑞祥地名をとるなど、あまりにもほしいままな命名が横行している。これらは、その土地の実情を的確に反映しているものとは言えず、日本の地名の新しい受難時代の到来と言つても過言ではない。それは、地名の危機であるばかりでなく、日本人の風土感覚を狂わせる重大な問題を孕んでいる。」と新地名の安易な命名を厳しく糾弾している。この内、あまり聞き慣れない瑞祥地名というのは、縁起やイメージのよい地

名で、典型的なのは美しい里という意味の「みさと」や日本の美称である「瑞穂」などという地名である。

かつてはそれぞれの土地に霊が宿り、そこに生きる人々の思いや祈りが込められていた地名が、安易な命名に押されて行き場を失い、さまよっているように思える。

一言

岡田 健嗣



年賀葉書

一般にはあまり知られていないことかもしれないが、またどれほど前から発行されていたのか覚えていないが、年賀葉書には、表面（宛名面）の左下に、小さな丸い切れ込みの入ったものがある。これは視覚障害者向けの配慮で、指で触れて、葉書の表・裏、上・下が分かるのである。視覚障害の身である私にとつて、これは大変ありがたい配慮である。これによつてかなりの部分、独力で宛名書きができるからである。私たちはかつてカナタイプライター、現在ではパソコンを利用して、年賀状を出している。

私は毎年十一月一日になると、最寄りの向島郵便局に電話をして、六百枚ほどの葉書を購入する。注文し

て数日で、局員の方が届けて下さる。このような宅配のサービスを受けるようになって、既に十年は越えたと記憶する。

ところが今年は驚かされた。

「左下に切れ込みの入った葉書が欲しい」と申し込んだのだが、その局には「割り当てがない」という返事が返ってきたのである。

そこで知り合いの何人かに聞いてみたのだが、どうやら私と同じ返事をもらったようなのである。というより、切れ込みの入った葉書を手に入れることのできた者は皆無だった。私は仕事場の近くの向島郵便局を利用しているのだが、東京ばかりでなく、地方の知人も手に入らなかったと言っていた。

真相を知りたいと思い、郵政会社に電話をかけた。

電話に出て下さった局員は、切れ込みの入った年賀葉書は例年通りの枚数発行していると言われて、私どもがそれを購入できなかった実態をご存じなかった。

「向島郵便局にも割り当てはあるはずだ、手に入らないはずはない」と言われた。そこでもう一度向島郵便局に確認の電話を試してみた。答えは同じ「割り当てがなかったので届けられなかった」と言う。割り当てがないという答えの中に、こんなことも言っておられた。「東京の中央の郵便局にも千枚しかない」と聞いた

ので、こちらにはとても回って来そうにないと判断した」と。その話を再度郵政会社の係員にお伝えして、「どうしてこのよなことになったか解明して欲しい、その答えを、マスコミを通して報道して欲しい」とお願いした。

今日（一二／〇八）現在、それらしい報道はないようである。

「点字毎日」一二月二日号に、「切れ込みの入った年賀葉書は四〇万枚」という記事が載った。これによると、「このような葉書は前年と同じ四〇万枚販売された。五年前の七分の一。このままではニーズがないということ、作成されなくなるかもしれないとの声もある」というのである。

例年通り購入しようとした私たちが手に入れられなかったことには、全く触れられていなかった。

さてどうなっているのだろうか？私に想像できる経緯を幾つか挙げてみたい。

・郵政会社の発表通り、切れ込みの入った葉書は四〇万枚作られ、販売された。ところが今年は、注文が例年より遥かに多く、全体のニーズに応じられなかったため、私たちの手には届かなかった。

・郵政会社の発表通り、切れ込みの入った葉書は四〇万枚作られた。しかし一般に販売される前に、何者

かによって買い占められて、私たちの手には届かなかった。

・発表では、昨年は四〇万枚発行されていることになっているが、実際は追加生産をした。今年は枚数を厳格に守ったために、ニーズを満たせなかった。

・郵政会社の発表は虚偽で、実際には、今年は切れ込みの入った年賀葉書は作られなかった。帳簿上四〇万枚を製造し、売れ残ったとして架空の処分をした。それによって製造コストを削減し、今後もニーズが見込めないと判断できるということになった。

果たして真相は何であろうか？

＊葉書の切り込みのような視覚障害者向けのデザインサービスの、一般に「ユニバーサルデザイン」と呼んでいる。しかし本来の「ユニバーサルデザイン」の概念は、誰にも有効であること、誰もが知っていて承認されていることが挙げられる。つまりこの葉書の切り込みは、現状では視覚障害者向けであって、ほとんどの人には知られていないことから、「ユニバーサルデザイン」と呼ぶには不十分との認識が、郵政会社にはあるようだ。

代筆

「口からうんちが出るように手術してください」

（小島直子著、コモンズ、二〇〇〇／五）という本がある。極めて刺激的な書名である。

著者の小島さんは、幼少時からの肢体不自由で、車椅子生活を送っておられる。日常生活の多くを、お母さまの介助によって営まれて来た。

ところがご自身の成長とともに、お母さまもお歳を召して来られる。とうとう小島さんのお世話ができなくなってしまった。

小島さんはそれまで、お母さまから受けるお世話しか経験して来られなかった。極端に言えば、お世話をする・されるという捉え方すらせずに済まされるようなお世話であった。実の母親の愛情の籠もったお世話は、正に空気や水のように、小島さんを育んで来られたのである。

しかしもうそうは行かない。ヘルパーさんという他人の専門家のお世話に頼らなければならなくなった。

私たち視覚障害者も、直面する状況は違うが、同様の境遇にあると言える。社会生活の多くは、身体の移動と書類の記入によって決定される。視覚障害者の社会的障害とは、この身体の移動と、ものの読み書き、とりわけ書類の解説と記入にあると言っても過言ではない。役所や金融機関、病院などでは、書類への記入や署名が、常に求められる。母が元気だったころ私

は、そんなとき何時も母と一緒にいた。そして記入や署名の必要のあるときは、母に代行してもらっていたのである。母は最も信頼のおける近親者であって、本人同様と扱われることを、自他ともに認めていた。このような代筆を咎める人もなかった。

このことは私一人に限ったことではなく、ほとんどの障害者は同様の境遇に置かれていてと考えてよいと思う。つまり多くの障害者は、母親かあるいはそれに代わる近親者の介助を受けて、介助者の高齢化に伴って起きる介助不可能という変化まで、その介助を受け続けるのである。その介助者の多くが母親であることを考えると、当事者は、言わば一生のほとんどを子どもとして過ごしていることになる。母親が介助できなくなった途端に、一人前の人間らしくしなければならなくなるのである。しかも当事者も、既に老境一步手前に差ししかかっているのである。

私は二年と少し前、障害者自立支援法という法律に則った、障害者の外出支援の事業を立ち上げた。対象となる障害者は、全身障害、視覚障害、知的障害を負う人たちである。それまでの私は、サービスを受ける立場であったが、それからはサービスを提供する立場となったのである。

私もいよいよ母に頼れなくなってきた。そうすると

ガイドヘルパーの皆さんのお世話を頼らなければならぬ。しかし書類の記入や署名という行為は、大変責任の重いものであるはずだ。できればガイドヘルパーさんたちの負担にならないようにしたいと目頃から考えて来た。ケースは多様だろう。何か大枠を提示するところから始めてはと思う。

私個人の考えを言えば、役所や金融機関では、担当の職員に代筆を依頼するのがよい。その考え方を実行する積もりで、今回三つの金融機関で、代筆を頼んでみた。予め電話予約を入れておいたところ、担当の職員の他に、もう一人加わったが、難しいことは言わずにお引き受け下さった。現状では、電話予約は欠くべからざるものであるが、近い将来には、この方法がスタンダードとなるよう願っている。

ある金融機関で、一つの体験をした。職員に代筆をお願いすると、「成年後見人を立てて、その人にお願いますように」と言われたのである。

「成年後見人」とは、知的障害者や認知症の高齢者を対象とした制度で、公的に委嘱されて財産の保全・管理、その他の法的手続きを、本人に代わって行う人である。

一般社会が障害者をどう見ているかの一端を知った思いがした。

村田先生の天津講演から

中国における漢点字の可能性

以下は、村田忠禧（横浜国立大学人間教育科学部教授）先生の、天津・南開大学での講演から、漢点字に関係する箇所の骨子です。

今は中国側に日本に漢点字という点字体系が存在すること、そしてそのアイディアを活用すれば中国語でも漢字を表現できる点字体系を作ることができること。そして日本と中国との間ではそれらの点字データの交換が可能になればよい、ということ伝えていくことが必要と思つて、とりあえず「遊説」活動をしているところです。

漢字を表現する点字

形に囚われずに文字としての機能を極限まで發揮させた文字がある。目に見える文字の世界では簡体字がそれに近いといえようが、実は日本には漢点字という文字体系がある。これは点字という突起の有無で漢字を表現する文字体系であり、まさにデジタル式の漢字

表記の極限形態である。漢点字とは大阪府立盲学校の教諭をしていた川上泰一（故人）が発明した漢字を表現できる点字体系である。

点字は日本語でも中国語でも通常は発音しか表現しない符号体系とされている。縦に三つの点が一列ならんだ六つの点の集合なので、最大でも六十三のパターンしか存在しないためである。点字とは点の凹凸による触読文字であるため、触覚による識別能力との関係で点の数を無制限に増やすことはできない。川上が考案した漢点字のもつとも独創的なことは、左側の列の点字（一、二、三の点）の上に一つの点（ゼロの点）を加えることで漢字の開始を、右側の列（四、五、六）の上にもう一つの点（七の点）を加えることで漢字の終了を意味する、と決めたことにある。このため八点からなる点字ではあるが、触覚的には六点かな点字と大差はない。

漢点字とはどういうものかをもっとも単純な事例で紹介してみよう。かな点字での「め」は六つの点すべてが突起する状態で表現するが、そこに漢字の開始と終了を意味する点を加えた場合（つまり八点すべてが突起状態）は「目」という漢字を意味する。ゼロの点（開始）が加わっただけなら「目偏」を、七の点（終

了) が加わっただけならば、「目の旁」を意味する。同様に、かな点字における「き」は一、二、六の点で表示する。そこに開始と終了が入った〇、一、二、六、七の点字は「木」という漢字になる。〇、一、二、六だと漢字開始符号があつて終了符号がないので「木偏」を意味する。そこで〇、一、二、六(木偏)と一、二、三、四、五、六、七(開始はなく、終了のみあるので旁の目)との組み合わせで「相」という漢字となる。

ここで紹介した事例はもつとも単純な場合にすぎない。現実の漢字もすべてこのように単純な偏と旁の組み合わせでできているわけではない。漢字は象形、指事、会意という造字法で誕生した基本的な漢字を基礎にして、形声、転注、仮借という方法で複雑で多様なものへと発展していった(六書)。なかでももつとも多いのは形声という合成の仕方であり、形声ではほぼ八割の漢字が成り立っている。この漢字の成り立ちの本質を非常に巧みにとらえ、それを点字という八点(実質的には六点)の点字符号の世界で漢字を体系的に表現した川上泰一の独創性は大いに称賛するに値する。

二組のパターンの組み合わせ(63×63)で原理的には3969の表現が可能である。これまで紹介し

た通り、常用的な漢字は日本語では3000字以内、中国語でも4000字前後で足りる、という現実を踏まえるならば、日本語だけでなく、中国語でも点字で漢字を表現することは十分可能であることが推測できる。現実の漢点字は三組のパターンまであるので、それで表現できるパターンは理論的には漢字の総数より多くなる。

私はかつて横浜国立大学に入学した全盲の学生からこの漢点字の存在を教えてもらった。かなの世界だけでなく、漢字の世界をも漢点字を通して知ることのできるこの学生は中国語を第二外国語に選択し、漢字の大海を実に積極的に探検した。市民のボランティア活動の支えもあり、パソコンで漢点字を扱うことのできる環境があることがそれを可能にした。

中国語にも日本の漢点字に類する点字があるのか、北京、台北、香港を調べてみたが、いずれも発音を表示する点字しか存在しなかった。それだけでなく、同じ北京語の表音点字でありながら、北京と台北では点字表記が異なっている。また香港の点字は広東語であるため、北京語の点字とはまったく違う。漢字を表現できる点字が中国語にもあればこのような不便は発生しない、とつくづく思った。

そこで点字の世界は字形には関係しないのだから国際的に共通する漢点字（国際漢点字）というものを作ればよい、と考えて、その必要性と可能性について論文を書いたことがある。その後、私の考え方には修正すべき点があることに気づいた。言語の違いを無視して国際的に共通する漢点字を主張するのは、やはり実際に点字を使う人の立場に立っていない不適切な論断である。日本語の漢点字は日本語の特徴にもとづいて成り立っている。中国語の漢点字も中国語の特徴にもとづいて作ればよいのであって、大切なことは相互に情報交換できる点字体系とすることにあるのだ。日本の漢点字を参考にして、ぜひ中国語漢点字を作るべき、と今の私は考えている。また日本の漢点字も改良すべき課題があるだろう。ともかく日本と中国で知恵を出し合って共同して漢字を表現できる点字体系を作ることが必要と思われる。それが実現できれば漢字文化の新しい発展となるし、漢字を誕生させた中国語への「恩返し」にもなりうる。二十一世紀の漢字文化はまず点字という形に囚われない世界で新しい展開が見られるのかも知れない。それが突破口となつて、漢字文化圏の問題を一緒に考える機運が高まることを期待している。

見果てぬ夢を（八）

山本優子

十 点字活版機



孝之進は、仕事の合間をぬつてできるかぎり教会に通い、夢中で点字聖書に読みふけるようになった。読めば読むほど、聖書の深さを覚え、造り主のもとに戻れたという喜びに満たされた。が、一方でなぜもっと早く点字に、そして聖書に出会えなかったのかと悔しくさえ思った。ほとんどの盲人が点字板を持つことができず、自分では何も読めず、教養を身につけることがあきらめざるを得ない現状を憂い、そのことを思い巡らしながら、孝之進は、増江に言った。

「私は、盲児のための学校を作りたいと願ってきたが、自分で書籍を読めないのでは主体的に学ぶこともできない。点字本にしても、一点一点打つて一冊ずつ作っているのでは、間にあわない。外国では点字を打ち出す機械が使われているというのだから、日本でもそういうものができてほしいものだな」

増江が、言った。

「じゃあ、私たちがそんな機械を作りませんか？」
孝之進は、仰天した。

「そんな……機械を作るなどと」

が、孝之進は、次の瞬間手を打った。

「そうだ。試してみよう。これは、主が我々に示されたことかもしれない」

印刷業がさかんだった薩摩での子供のころのことを孝之進は思い出したのだ。印刷所で活字を拾う人たちの姿や活版機が忙しく動いている様子を飽かずに眺めていたではないか。孝之進のうちに、暗誦した聖句が浮かんできた。

「神は御意思を成さんために汝らのうちに働き、汝らをして志をたて、業を行はしめ給へばなり。汝ら咳かず疑はずして、すべてのことを行へ。……（ピリピ書二章十三節・十四節）」

「我は卑しきにをる道を知り、富にをる道を知る。

また飽くことにも、飢うることに、富むことにも、乏しきことにも、一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者によりて、すべてのことを成し得るなり。……

（同四章十二節・十三節）」

二人は、ひざまずいて、

「点字を印刷できる機械を發明することが、み旨に

かなうのであれば、どうかさせてください」と、祈った。

孝之進の頭の中には即座に、昔新聞社で見ていた活字の活版印刷機からくる点字活版印刷機のイメージが浮かんできた。それからの孝之進は、治療の合間をぬってこのアイディアに従って点字活版印刷機を造る作業にとりかかった。頭に六点を鑄造した活字を長方形の箱に植え込み、水で濡らした紙をその上に置き、ゴムローラーで軽く押すと、点字が紙に浮き上がるはずというものだった。が、なかなか思うように均等の点字が刷れない。

増江と母千代は、板を切ったり、点字の活字を作り植え込んで刷る作業を繰り返したりと、懸命に働いた。だが、失敗が続いた。材料そのものを手に入れるにも経済的に苦しいため、充分に試すこともできない。孝之進は、思い切って教会に点字印刷機製作のために祈って欲しいということと、不要な板や紙がある人には捧げてもらいたいということを祈りの課題として持っていった。すると、思いがけないところから、手紙が舞いこんだ。神戸女子伝道学校（現神戸女学院）校長のタルカット女史からだった。教会信徒から孝之進たちの試みを伝え聞いた女史は、数十円もの献

金をそのために捧げた。孝之進は、神の家族の一員であることをつくづく思い、胸が熱くなった。増江も涙をこぼしながら、孝之進の口述でタルカッタ女史にお礼の返信をしたためた。

製作は更に失敗を重ねた。片面だけに印刷することすらうまくできないうちから孝之進は表裏二面刷りのできる印刷機を作りたいとがんばった。かさばる紙の量を減らし読みやすくするために表裏二面刷りにしたかったのだ。アメリカでは二面刷りにしたページを製本して点字聖書を作れるのだから、できないはずがないという思いがあった。来る日も来る日も改良を重ねているうちにちよつとした不注意から小火を起こし、せつかく作った機械が燃えてしまうということが起こった。孝之進夫婦が失意のうちにも、「悔い改め」の祈りをしているといううわさが教会関係に流れたからだろう。タルカッタ女史は祈りのこもった手紙を添えて再度多額の献金を送ってよこし、数人の信徒たちからも献金が与えられた。おかげで、よりしつかりした試行品を製作し、繰り返し改良していくことができた。さんざん試して、遂に読みやすい点字を片面に刷れるものができた。孝之進と増江、母千代は手を取り合って感謝の祈りを捧げた。一九〇五年（明治三

十八年）二月の寒い朝であった。

試作として、「教育勅語」「高等小学読本巻一」「修身巻一」などを刷り上げ、製本した。とても時間と労力のかかる作業で、孝之進自身も増江も千代もくたくたになった。が、点字の本が量産できるという喜びと興奮に満ちた楽しい作業だった。

ところが、また問題が起きた。せつかく製作に成功したかに見えた印刷機も繰り返し使ううちに摩滅し、木組がゆるんでうまく刷れなくなってくるのだ。

「木製では模型にすぎないな。長くは使えない」

孝之進は、つぶやいた。増江が言った。

「祈りましょ。神様が長年使える材料を与えてくださるように」

孝之進と増江、千代はその場でひざまずいて祈り始めた。

「木を使ったのでは、長く使えません。もし、もっと摩滅しにくい素材を使えるのであれば、与えてください……」

祈り終わると、玄関をガラガラひく音がした。なじみの米麦取引所仲買人の田中だった。

「来てみたら、なんやらしゃべつとうのが聞こえたから、思わず立ち聞きしてしもた。誰に頼みごとしと

ったんですか？」

孝之進は、苦笑いしながら、言った。

「点字印刷機をこうやって造ってみたんですが、木製ではすぐだめになってしまふのです。それで、私たちが信じている神様にもっと丈夫な材料を与えてくださいと祈っていたのです」

「ふーん、えらいこととしてはったんやなあ」

田中は、上がりこんできて、印刷機を触っていたが、言った。

「おんなじ造るんやったら、なんで鉄を使わへんのですか？」

「鉄みたいなものが使いたいけれど、どうやったらいいか……」

「よし、決めた。資金出しますよって、これ、ええもんに完成させましょ。なんやら、あんたらの信じてる基督の神さんがわしに協力せえ、言うてはるような気がしますのや」

こうして、田中の資金調達と地元の製鉄会社への依頼のおかげで孝之進が考案した木製点字活版印刷機が鉄製となって、完成した。そのころ、孝之進の家で寝泊りを始めていた盲生徒加藤儀平（かとう ぎへい）

は、点字の読み書きを覚えたばかりだった。儀平は、ためし刷りされたものを次々に読んでは、歓声を上げた。孝之進は、儀平の様子に涙を流した。

（この子たちが自由にたくさんのもので読みこなせるようになって、主の働きをしていけるように、主よ、力と知恵とを与え給え……）

ふいにふらつきを感じ、孝之進は床に膝をついた。

「先生、どうかしました？」

異常を感じ取った儀平の声が聞こえた。

孝之進は、あわてて、元氣そうな声を出して言った。

「大丈夫だ。儀平、田中さんらに感謝をこめて、この機械の納入感謝の式をしようと思う。おまえ、感謝文を書いて朗読してみるか」

「はい」

明るい儀平の声に孝之進の心は温かくなった。が、すぐ不安の黒雲が心の中に湧き上がっていった。

（いつまで元気に働けるか……とにかく生かされている時間、急がなくてはならない。主よ、私の使命を全うさせ給え）

孝之進が自分の時間があまり残されていないかもしれないと感じ始めた日でもあった。

田中の取引所に活版機を運び込んで、感謝の式を執り行う日、取引所や製鉄所関係、教会関係の人々が大勢詰め掛けた。儀平は、孝之進の感謝文と自分の作文を点字で書いたものをみごとに読み上げた。人々は惜しみない拍手を送った。田中は満面笑みを浮かべて、挨拶した。

「この発明によって、盲児教育の可能性がわが国で初めて示されたと言いつけるのであります。左近允先生は、今後更に新しい働きをされ、わが国の教育界に一石を投ずることを確信いたします」

多聞基督教会の松井牧師も激励の言葉を送った。

「訓盲院開設に向けてふたたび立ち上がってくださいることを強く望みます。御国建設のためです。みなさん、お祈りと協力をお願いします」

孝之進も増江に手を引かれて前に進み出、感謝を述べたが、感極まって自分では何を言ったのか、よくわからなかった。

盛んな拍手を受けながら、元の場所に戻った。後から増江が言った。

「コウさんったら、突然日本を変える訓盲院造りに取り組めます、なんて言い出すから、驚きました」

孝之進は、苦笑した。それが、自分が願っている夢の一つなのだと改めて思った。

十一 神戸訓盲院

孝之進のもとには、そのころ加藤儀平、浅野勘蔵、小林文平、岡田順、森田寅松、高橋秀三、近藤鉄男の七名の盲生徒が集まっていた。松井牧師は、孝之進の治療院を訪れた際、その子供たちが熱心に、嬉しそうに孝之進から教えを受けているのを見ていた。牧師は、しばしば孝之進を促した。

「左近允さん、私塾開設は、主があなたに託しておられる使命です。いつまでも経済的にもそっくり自分がかぶって子供たちを教えてはいけません。盲教育に理解のない社会への啓蒙のためにも、援助を受けて私塾として開設すべきです」

学校よりも書籍刊行が先と考えてきた孝之進も、私塾開設に取り組む時が来たのではないかと考えるようになった。松井師の呼びかけで多聞教会有志に加えて神戸市内の賛同者も加わり、募金活動が始まった。最初は経済的援助を広く求めることを躊躇していた孝之進だった。が、全国の盲児すべてが適切な教育を受けられるようにするための啓蒙活動につながるのだという松井牧師の勧めで孝之進自らも講演に出向いたり、篤志家を訪ねたりするようになった。その人たちの援助と募金により、ついに楠町（くすのきちょう）五丁

目一八一番屋敷の一民家を借り受けることができた。孝之進夫婦はそれまで住んでいたところを引き払ってそこに移り、「神戸訓盲院」として創始することにした。

一九〇五年（明治三十八年）六月十日が開所式という運びになった。この日が、現在でも兵庫県立盲学校の「創立記念日」となっている。

ささやかな開所式で、孝之進は力をこめて語った。

「今日から、夢に向かって、我々は前進するものがあります。考えてみてください。百年後、この訓盲院は、どうなっていることでありましょうか。私には、見えるのです。日本中、いえ世界中にあまたの卒業生が遣わされています。彼らはそれぞれの持ち場で『地の塩』『世の光』として活躍しています。この学び舎が日本社会と世界を変えるものとして用いられるいくのです……」

当時の盲人界の現状からするとあまりに突拍子もない発想だった。増江でさえ、後で孝之進に、

「みなさん、あきれてしまわれたんじゃないですか？」

と、言ったほどだ。が、孝之進は、微笑んだ。

「人にはできないが主なる神にはできる」

（つづく）

「東京漢点字羽化の会」

第23、24回例会報告並びに

第7、8回「学習会報告」とわたくしごと



木村 多恵子

第23回例会、2007年10月10日（水、夜）

18…30→20…30

自己紹介は何時もの通り。これは視覚障害者とか何か「会」をするときには、必ず落としてはならないプログラムである。

テキストの中の古文の資料には、漢字が空白になっているところもあり、それをどう書き表すか、漢文の書き方、何種類かの資料の読み比べを如何に解りやすくするか、皆さんが真剣に取り組んでくださる。

もう一冊入力を手がけてくださっている本も、漢字がどう組み合わせられて作られているか、数学の記号などを使って「字式」の形で、その構成を説明した。むろん、岡田さんの探求心による努力と向学心の集積が「D I C C B（D I Cは辞書、C C Bは漢点字の意）」に結晶している。これまでにも、岡田さんはこの漢点字辞書のデータ提供を申し出ていたが、今日の

岡田さんの、文字を分解し、如何に合理的に構成されているかを、事細かに説明するのを見て、初めて「データをください」とのお申し出があった。現在入力している本には、この辞書が有効だからである。

漢字の構成の説明を聴くことに、皆さん、はまり込んで、「学習会」用の準備の時間が乏しくなり、結局一人の会員がご自宅で作って来てくださることになった。

「学習会」用レーズライターで書く文字、

氷、（にすい）、「力」、

示、（ネ、示偏^{あすへん}）、私、禾^か（ノ木偏^{のぎへん}）、

走、（走によう）、進、（進によう）、

火、（列火）、女、（女偏）、

「氷」の近似文字、永、

第7回「学習会」

2007年10月20日（土、夜） 18…30…20…30

自己紹介、そして直ぐ学習に入った。

前回の復習も同じである。

新しい文字は、

土、手、戸、人、仁、水、氷、

土偏、手偏、ニスイ、人偏、

氷の近似文字の永

人と仁の違い、使い分けの説明をしたとき、岡田さんが「仁、義、礼、智、信の仁です。」と言った。みんな「南総里見八犬伝」のことは解っているのだが、その他に加えられている「忠」と「孝」は思い出せたが、後の一つが思い浮かばない。家に帰って、資料に当たってみると、上の五つは、1265年成立の『五常内義抄』と言う、わたしには難しい教訓書の序文にある、「夫五常は仁、義、礼、智、信、これ也。仁は慈（慈愛の慈）、義は和（平和の和）、礼は順（順番の順）、智は賢（賢い）、信は真（真実の真）也。人の人たるは、この五常を振る舞へり。人の人たらずるは、五常に常に背むけり。」とあった。

『南総里見八犬伝』は、むろん滝沢馬琴作のもので、上の五文字に、忠（忠義の忠）、孝（親孝行の孝）、悌（なかつまじい）の三文字を加えて、それぞれが、この文字の印のある玉を持って、お家再興を謀る物語である。脱線ついでにわたしの体験を一つ。

以前、わたしはある点字図書館で、「点写」の仕事をさせていたことがあり、その仕事の中で、この「南総里見八犬伝」を行ったことがある。残念ながらこの「仁、義、礼、智、信、忠、孝、悌」もカナ文字で、わたしは図書館に、この八つの文字に該

当する漢字を問い合わせた覚えがある。個人的には興に乗れないものであったが、もしこれが漢点字であったら、もう少しおもしろかったかもしれない。

第24回例会、2007年11月7日（水、昼）

13…30…15…30

いつものように「学習会」の準備をし、レーズライターでの漢字も決まり、今回はお二人の会員が、レーズライターでの文字書きをして来てくださることになった。

学習漢字

玉、方、石、耳、車、門、病、病垂、行、イ

字式を使って、文字の構成をどう表すか、岡田さんの解説を聞いた。沢山の工夫が成されていることがよく解る。

「東京漢点字羽化の会」が始まって、丁度2年になった。12月から3年目に入るが、会の、これからの活動方針について、12月の例会のときに話し合うことにした。

墨田区立図書館での小さな集まりの中から、正式に「東京漢点字羽化の会」の会員に加わって下さり、会員がお一人増えてうれしい。

ガイドヘルパーのお一人が、「羽化」の活動に大き

な関心を寄せて下さり、賛助会費を下さった。感謝して有効に使わせて頂きたいと思っている。

「羽化」64号を配布した。

木村は、放送大学通信指導問題散文編が送られて来て、問題をお一人の会員が点訳してく下さり、11月7日に解答提出の手続きもお願ひした。

第8回「学習会」

2007年11月17日（土、夜）18…30…20…30

第一会議室

自己紹介と、前回「学習会」の復習は原則通り行なった。

前回の復習の中で、水の文字の形は、「水の流れる形を象った」と説明されたが、レーズライターで書いていただいたのを見ながら、視覚的に観察すると、水が流れる様子はこんな風に見えるのかと、木村は実際の水の流れを見ていないので、そうか、と納得するしかないが、漢点字では「水」と書くと、最初に覚えたとき、この形の方が「水」だという感じが素直に伝わって来た覚えがある。「氷」は、「水が冷えて固まったもの」で、「氷」を象ったものだと言明され、これも文字を見ながら「そんなものか」と思った。しかし、これも漢点字で習ったときを思い出すと、やはり

点字の、1・2・3の点の形がそのまま右側にずれた点字の配列が、ストンと「氷」だと覚え込めたのは何故だろう。

新しい文字、

力、示、示偏、私、禾偏（ノ木偏）、

走、走によ、進、進によ、

火、列火、女（女偏）、

2008年1月20日に、横浜羽化の会主催の新年会が、横浜市の桜木町のワシントンホテルで行われることを紹介し、参加のお誘いをした。

* 予告

12月の例会（第25回）

2007年12月12日（水、昼）

13…30…15…30
7階第2会議室

第9回「学習会」

2007年12月22日（土、夜）

18…30…20…30
7階第1会議室

1月の例会（第26回）

2008年1月9日（水、夜）

18…30…20…30
7階第2会議室

第10回「学習会」

2008年1月26日（土、夜）

18…30…20…30
7階第1会議室

わたくしごと

大別して、人は物事を論理的に考えられるタイプの人と、情緒的に思いをめぐらす人とがいる。発想から、決断に至るまでの時間のかけ方は人により、自ずと差異があるに違いないが、恐らくその思考過程は、論理的に考えられる人は、それなりに共通しているのだと思う。解決しなければならぬ問題を抱えたとき、事柄の本質を理路整然と整理し、科学的合理的に無駄のない解決法を見つけ、実際に行動を取れるのだと思う。わたしには遠く及ばないことばかりで、ただただ感心しきりである。

では、わたしはどうかというと、一方の叙情性豊かな人間ではなく、単に愚かな「ノロマ」だけのものがある。自己弁護をさせていただけば、物事を決め、行動を起こすまでの、トロく、ぐずぐずの中に、道草のような心の揺らぎが起きるのである。

実例を挙げればこんな風である。

ある時、作りためておいた雑巾が無くなりかけていることに気づき、古くなった夫の下着をとりわけた。雑巾として使いやすい大きさにするため、無駄のないように畳み、不必要な所を取り除こうとする。ここからがわたしの苦手な仕事になる。必要な大きさに畳ん

で、鉾を入れようとすると、手が強ばってしまふ。同じことでも、自分のものやタオルを切るときはなんとも感じないのだが、夫のものは、「あつ、手を切る、足を切る」。そんな恐怖が全身を揺さぶり、ザワザワと泡立ってくる。単に古くなった布とは思えない。ボタンを切り落とすのさえ気が持たない。刃先を広げては閉じ、閉じては開き、なかなか切ることができない。

若い頃ならいざ知らず、六十路を過ぎた、今でも変わらないこの恐怖を避けようと、「いつそ切らずにこの形のまま使おうか」と試みたこともある。鉾を入れないままで、ガラスや棚をふいてみた。けれども、これがまたやっかいで、大きすぎたり、じやまだったり、第一この方法も、ますます気分が悪い。結局この、「雑巾に整形する」過程さえ過ぎ去れば、もはや雑巾と化して何度も使ううちに、あの背筋を襲う、寒気のような恐怖は、どこかへいつてしまうのであるから、今では元のやり方に戻している。つまり若い頃から似たようなことを何度も繰り返してきたのである。それにしても、鉾を使うときの、全身が泡立つ恐ろしさ、ピリピリとした痛みが走るあの違和感は、なかなか慣れるものではない。

でも、いったい、この思いは何だろう。合理的に物

事を考える習慣を持っている方々には、古い衣類は、ただの古い布切れとして認識し、こんな逡巡は起こらないのだろう。

物に魂が宿る、と思うほどの鋭い感性が、あるわけではないが、やはり、昔の人は、自分が大切に使ったもの、掌に入れていとしんだ物には、使った人の魂が注がれると信じて、「形見分け」をしたのはこんなところからではないだろうか。近頃行われているような、形見分け代り、あるいはその略式の香典返しではなく、本当の形見分け、つまり故人が身につけていたものや、愛用していた物を、生前に世話になった人や近親者、親しい友人に、感謝と愛を込めて記念として送る、これが本当の形見分けであり、その思いを伝えたいと願うのが自然ななりゆきであらう。

少なくとも、母親が使っていたものや、父親の愛用していたものを、いつの間にか子供が使いはじめていくということは、多くの方が経験していると思う。それが「形見分け」だとは気づかず！そう考えると、やはり物に魂が宿るというのは的はずれではないのであろう。

すっかり横道に逸れてしまったが、ことほど左様に必要な領を得ない回り道ばかりしているわたしである。

2007年11月25日

『紹介』

東京漢点字羽化の会の漢点字訳書

『神さまがくれた漢字たち』

2004年11月19日 初版第1刷発行

監修者 白川 静

著者 山本史也

編者 特定非営利活動法人

文字文化研究所

神さまがくれた漢字たち

白川 静 山本 史也

第一章 初のお物語

四つ目の蒼頡

中国の遠い遠い昔のこと、両眼にそれぞれ二つの瞳、あわせて四つの瞳をもつ男、蒼頡、その蒼頡はまるで険しい目つきで、さきほどから、たつきよろきよろきよろきよると、何かある一点を見つめてばかりいます。それだけでもうただならぬ気配です。その何かとは、じつは何のへんてつもない鳥と獣の足跡であったのです。しかしやがてそれらの足跡の模様ごとに微妙な異なりのあること、そしてそれには一定のきまりが貫かれていることを、その異形の目は、しかととら

えました。蒼頡は自ら察した、その自然の規律を応用して、漢字をつくったのである、と久しく中国では伝えられてきました。

そのとき、天は粟を降らし、鬼は泣き叫んだとも、『淮南子』は語りますが、どうにも信じがたいことです。鬼は私たちの想像する鬼ではなく、すなわち死霊です。

たしかに未曾有のことを語る怪異譚ではありますが、ただ、漢字の誕生が、あたかも天と地の秩序をひっくりかえすような、畏るべき奇蹟として中国古代の人々に受けとめられたであろうことは、もう疑う余地がありません。漢字の初めにたいする、人々のとてつもなく大きな驚きと動揺とが、この不思議な伝説からうかがい知ることができそうです。もともとわずか一人の男の魔術めいた手品ごときで、漢字がひよいひよいとつまみだされたものなどとは、とうてい考えられることではありません。

やはり文字は、人々がその時代の社会や生活の切実な求めに応じて、年月を費し、心を尽くし、工夫を凝らして、つくりあげたものです。漢字としてそうです。のちとくに漢字は、しだいにその形を整え、数を増し、ついにはそれら一字一字が強いつながりを保ちながら、その壮観な世界を築いてゆくのです。

その漢字の世界は、あるいは星座の世界にたとえられるのかも知れません。星々は、それ自体、一つずつの石の塊にすぎません。もともとはどのようなつながりもなく、ただ別々に空に散らばって浮かんていただけの星々は、「神話」や「物語」のうちに収められ、互いに結びあわされて、やっと一つの小世界を構成します。

そしてこの一つずつの小世界には、それぞれにふさわしい呼び名が与えられました。それが星座です。夜ごとに紡がれる星々の「物語」は、またその星座と星座とをうつくしくつなぎ、ここに星座の「神話」が形成されます。このとき、星々はじめて生命を注がれ、あたかも自ら発光するものでもあるかのように、その有機的な世界を皎々と夜の空にひらきはじめるのです。

漢字の世界はといえば、もう生まれた当初から、その一字一字は互いに緊密に調和して、それ自体で、整然とした世界を構成していたのです。その成立のときにしてすでに漢字の世界は「物語」られるものとしての宿命を負っていたともいえます。

その、星座にもたとえられる漢字の世界は、おおよそ三三〇〇年前、中国では、殷という王朝が最も安定した時期、紀元前一三〇〇年ころにつくられたものと

されます。じつは、それ以前の「夏」と呼ばれる時代にも、たとえば陶器に描かれた、数字や文字らしき模様が見られなくもないのですが、もとより、それは文章を形づくるはたらくもたず、またほかの文字らしきものとも結合することのない、いわばひとりぼっちの符号でしかありません。それはまだ文字といえないのではないかと思います。漢字は、漢字の世界に属してはじめて、その文字としての生命をもつからです。

星座は、宇宙に生まれた無数の星々の壮大な集合とあってよいのですが、それにくらべると、生まれた当初の漢字の世界は、せいぜい一万字にも満たぬ文字から成り立つ微小な世界にすぎません。たしかに微小な世界ではあるのですが、しかし、その世界はなにしろ人々の長期にわたる努力によって結実した世界なので、すから、いきおいその一字一字の漢字には、中国古代の人々の祈りや思い、また信仰や認識のあとが深々と刻印されているはずなのです。漢字はけっしてわずか一人の偶然的思いつきやひらめきで、ある日突如にして生まれるようなものではありません。もしそうならば、漢字がこれほど長く綿々と、私たちの現在にまで生きのびてきた、そうして、じじつ生きのびていることの理由が適切に説明できないように思われます。

漢文のページ

碩鼠^{せきそ}

〈詩經^{しきやう}〉

樂 ^レ 逝 ^{キテ} 三 ^ニ 碩 ^ニ	樂 ^レ 逝 ^{キテ} 三 ^ニ 碩 ^ニ	樂 ^レ 逝 ^{キテ} 三 ^ニ 碩 ^ニ
郊 ^ニ 將 ^ニ 歲 ^ニ 鼠 ^ニ	國 ^ニ 將 ^ニ 歲 ^ニ 鼠 ^ニ	土 ^ニ 將 ^ニ 歲 ^ニ 鼠 ^ニ
樂 ^レ 去 ^リ 貫 ^{ヘシ} 碩 ^ニ	樂 ^レ 去 ^リ 貫 ^{ヘシ} 碩 ^ニ	樂 ^レ 去 ^リ 貫 ^{ヘシ} 碩 ^ニ
郊 ^ニ 女 ^ヲ 女 ^{モニ} 鼠 ^ニ	國 ^ニ 女 ^ヲ 女 ^{モニ} 鼠 ^ニ	土 ^ニ 女 ^ヲ 女 ^{モニ} 鼠 ^ニ
誰 ^カ 適 ^{カニ} 莫 ^シ 無 ^{カレ}	爰 ^ニ 適 ^{カニ} 莫 ^シ 無 ^{カレ}	爰 ^ニ 適 ^{カニ} 莫 ^シ 無 ^{カレ}
之 ^レ 彼 ^ヲ 我 ^ヲ 食 ^{フコト}	得 ^ニ 彼 ^ヲ 我 ^ヲ 食 ^{フコト}	得 ^ニ 彼 ^ヲ 我 ^ヲ 食 ^{フコト}
永 ^ク 樂 ^ニ 肯 ^テ 我 ^ガ	我 ^ガ 樂 ^ニ 肯 ^テ 我 ^ガ	我 ^ガ 樂 ^ニ 肯 ^テ 我 ^ガ
號 ^{バン} 郊 ^ニ 勞 ^{ルコト} 苗 ^ヲ	直 ^ヲ 國 ^ニ 德 ^{スルコト} 麥 ^ヲ	所 ^ヲ 土 ^ニ 顧 ^{ミルコト} 黍 ^ヲ

碩鼠^{せきそ}碩鼠^{せきそ} 我^わが黍^きを食^{くら}うこと無^なかれ

三^{さん}歲^{さい}女^{なんじ}に貫^{つか}えしも 我^{われ}を肯^{あえ}て顧^{かえり}みること莫^なし

逝^ゆきて將^{まさ}に女^{なんじ}を去^さり 彼^かの樂^{らく}土^どに適^ゆかんとす

樂^{らく}土^ど樂^{らく}土^ど 爰^{こゝ}に我^わが所^{ところ}を得^えん

碩鼠^{せきそ}碩鼠^{せきそ} 我^わが麦^{むぎ}を食^{くら}うこと無^なかれ

三^{さん}歲^{さい}女^{なんじ}に貫^{つか}えしも 我^わに肯^{あえ}て德^{とく}すること莫^なし

逝^ゆきて將^{まさ}に女^{なんじ}を去^さり 彼^かの樂^{らく}國^{こく}に適^ゆかんとす

樂^{らく}國^{こく}樂^{らく}國^{こく} 爰^{こゝ}に我^わが直^{ちよく}を得^えん

碩鼠^{せきそ}碩鼠^{せきそ} 我^わが苗^{なえ}を食^{くら}うこと無^なかれ

三^{さん}歲^{さい}女^{なんじ}に貫^{つか}えしも 我^わを肯^{あえ}て勞^{いたわ}ること莫^なし

逝^ゆきて將^{まさ}に女^{なんじ}を去^さり 彼^かの樂^{らく}郊^{こう}に適^ゆかんとす

樂^{らく}郊^{こう}樂^{らく}郊^{こう} 誰^{たれ}か之^{これ}を永^{なが}く号^{さけ}ばん

※同様のくり返しを持つ単位ごとに行あけしました。



碩 鼠 碩 鼠 無 カレ 食 フコト 我

ガ 黍 ヲ

三 歳 貫 ヘシモ 女 ニ 莫 シ 我 ヲ

肯 テ 顧 ミルコト

逝 キテ 將 ニ 去 リ 女 ヲ 適

カント 彼 ノ 樂 土 ニ

樂 土 樂 土 爰 ニ 得 ン 我 ガ 所

ヲ

(以下、省略)



碩鼠＝碩は大きい意。大ねずみ。ここでは、過酷な税を取り立てる役人または君主にたとえる。

三歳＝三年。長い年月をいう。

貫女＝「貫」は仕える。租税をおさめてつかえる。「女」は「汝」に同じ。

爰＝語調を整えるための助字。発語の助字。

「將去女適彼樂土」

(將に女を去り彼の樂土に適かんとす)

「將」は「まさに…(セント)す」と読む再読文字。「今にも…になりそう」「今こそ…しよう」の意を示す。

『詩經』：中国最古の詩集。殷から春秋時代までの歌謡305編を伝えている。作者名はしるされておらず、すべて詠み人知らずの作品である。

(参照図書) 遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』(旺文社)



漢点字講習用テキスト

初級編 第六回

3 複合文字 (1)

(前回の続きです。)

※ 「𠩺」(ウ冠)を部首として含む文字。

(13) 字𠩺𠩺 ジ あざ あざな

「ウ𠩺𠩺𠩺」の下に「子」の形の文字です。「ジ」と読んで「文字」を、「あざ、あざな」と読んで、土地の名、人の名を表します。「ウ冠」は屋根、「子」は子どもを表して、子どもを大切に育てるという意味を表します。漢点字では、「𠩺」でウ冠を、「𠩺」で子を表します。

「文字」「漢字」「ローマ字」「数字」「字句」「字引」

(14) 宗𠩺𠩺 シュウ ソウ むね みたまや

「ウ𠩺𠩺𠩺」の下に「示」の形の文字です。屋根の下に祀られた祭壇を表しています。先祖を祀った〈御霊屋〉、氏族がそこに集う場所、また氏族をとりまとめる理念などを表します。漢点字では、「𠩺」(ウ冠)と「𠩺」(示)で表します。

「宗教」「宗派」「禅宗」「日蓮宗」「浄土宗」

(15) 宝𠩺𠩺 ホウ たから

「ウ𠩺𠩺𠩺」の下に「玉」を置いた形の文字です。屋根の下、建物の中に、大事なものを保管している形を表しています。「玉」は、丸く透き通った、美しい光を放つ貴石を意味します。漢点字では、「𠩺」(ウ冠)に「𠩺」(玉)で表します。

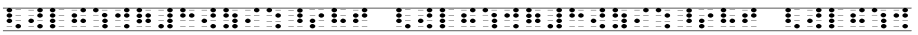
「宝石」「宝玉」「宝物」「財宝」「人間国宝」「宝島」「宝籤」

・「安」とそれを含む文字。

(16) 安𠩺𠩺 アン やす-い

やす-らか やす-んずる

「ウ𠩺𠩺𠩺」の下に「女女」の形の文字です。屋根の下に女性を置い



て安心させる、心を落ち着かせる。安らかで落ち着いた、安心して生活が営める様子を表しています。漢点字では、「𠄎 (ウ冠)」と「𠄎 (女)」で表します。

「安心」「安全」「安価」「安易」「安堵」「保安」「平安」「国家安泰」

(17) 案𠄎𠄎 アン つくえ かんが - える
あん - ずる

「安安」の下に「木木」を置いた形の文字です。元は肘を乗せる「つくえ」を意味していましたが、現在では、意見や計画をまとめたものの意で用いられます。また、「思う」とか「心配する」とかの意でも用いられます。漢点字ではウ冠を省略して、「𠄎」で「安安」、「𠄎」で「木木」を表します。

「案件」「案出」「案内」「案外」「提案」「議案」「答案」「名案」

・「穴」とそれを冠とする文字。

(18) 穴𠄎𠄎 ケツ あな ほらあな

「ウ𠄎𠄎𠄎」の下に「八`八」の形の文字です。屋根の下に穴を掘って住む、穴居住宅を象ったものと言われます。また、漢方・鍼灸で言う「経穴」の意味も含みます。漢点字では、「𠄎 (ウ冠)」に「𠄎 (八)」で表します。

* この文字は、「穴冠」として、一つの部首をなして、新たな文字の要素となります。

「穴居」「洞穴」「経穴」

(19) 究𠄎𠄎 キュウ ク きわ - める
きわ - まる

「穴𠄎𠄎𠄎」の下に「九`九」を置いた形の文字です。「九`九」は、腕を曲げて、奥深く差し込んだ形を象った文字で、ここでは、穴の底のどん詰まりまで手を差し入れた形を表しています。漢点字では、「𠄎 (穴冠)」に「𠄎 (九)」で表します。

「研究」「追究」「究極」「究明」

「ご報告とご案内」

一 都立鷺宮高校でお話させていただきます

来る12/20(木)に東京都立鷺宮定時制高等学校で、漢点字訳のボランティア活動と視覚障害者の生活について、岡田がお話しさせていただくことになりました。

昨年八月に、出版Ud研究会のセミナーで漢点字を取り上げていただき、お話しさせていただきました。その折りの様子が同会のホームページに掲載されて、それをご覧になった先生がお声をかけて下さいました。

同校には「進路講話」という時間があつて、毎年校外の者の話を聞いておられるとのことで、今回は漢点字の話を聞くということになったとのことです。

今年から都立の高等学校では、「奉仕の時間」という授業が設けられて、点字の勉強をなさっておられます。そこで「漢字を表現する点字」にご関心をお寄せ下さいました。

お話ししようと考えておりますことを記しますと、

- ・ルイ・ブライユと点字の發明
- ・石川倉次と日本点字(カナ点字)の翻案

・川上泰一と漢点字の創案

・視覚障害者と社会

・視覚障害者と読書、およびボランティア活動

二 漢検研究奨励賞

横浜国立大学の村田忠禧先生から、「漢検研究奨励賞」のご案内を、情報として頂戴致しました。漢点字を対象とした研究論文で応募してみてもどうか、との勧めです。漢点字の存在をより多くの人に知ってもらうことの方法の一つです。

募集要領は以下の通りです(一部省略)。

平成19年度 漢検研究奨励賞

◆実施概要◆

1. 趣旨

漢字研究または漢字に関わる日本語研究の分野における優れた学術的研究・調査等に対して、その功績をたたえ社会全体に広く公表していく制度です。

将来一層発展することが有望視される、若い世代の清新な学究の優れた研究論文を選考し、更なる深化を奨励するため、懸賞論文形式の「漢検研究奨励賞」を設定します。

2. 奨励対象

◆ 漢字研究または漢字に関わる日本語研究。

※ 文芸・文学に係るものは、対象にしない。

◆ 将来、一層の研究、調査の深化、発展が期待できる若い世代の研究（者）であること。

◆ 応募者本人が日本語で作成し、120枚以下（400字詰め原稿用紙換算）の分量であること。

◆ 既に他に公表した論文は対象外とする。（学位請求論文は、「公表」と見なさない。）

※ 他賞・他誌等に公表前の論文でしたら、ご応募いただけます。

3. 選考委員

阿辻哲次 京都大学大学院人間・環境学研究科教授
笹原宏之 早稲田大学社会科学総合学院教授

森 博達 京都産業大学外国語学部中国語学科教授
山本真吾 白百合女子大学文学部国語国文学科教授
(アイウエオ順)

4. 表彰（省略）

5. 応募について

(1) 応募資格・条件

応募締切日現在で45歳未満である方。

共同執筆の場合は、すべての執筆者が45歳未満であること。

共同執筆の場合は、それぞれの執筆分担を論文中に明記すること。

・ 主として、学校教育・研究機関の教員、研究者、大学院在籍者、教育委員会等の教育行政に携わっている方を想定しております。

(2) 応募方法（自由応募）

① 『応募用紙』（当協会所定のもの）

② 『応募論文の概要』（当協会所定のもの）

③ 『応募論文』

応募論文は次のいずれかの形式でご提示ください

1. 原稿用紙に手書きしたもの

2. ワードプロ等で作成し、印刷出力したもの

3. ワード・一太郎仕様のデータFD(CD-ROM)

(3) 応募締切

平成20年1月10日（必着）

〒600-8685 京都市下京区烏丸通松原下る

五条烏丸町398

財団法人 日本漢字能力検定協会

『漢検研究奨励賞』係

三 『神さまがくれた漢字たち』

ご紹介致しましたように東京漢点字羽化の会では、白川静監修、山本史也著の『神さまがくれた漢字たち』の漢点字訳を進めております。本書は中高生向けとなっておりませんが、内容的には大人にも充分読み応えがあります。総ルビですので、漢点字を十全に習得しておられない方でも、充分読める本です。

ニーズをお待ち申し上げております。

四 二〇〇八年新年会

例年通り、二〇〇八年の新年会を企画しております。会員、読者、漢点字学習者、その他本会の活動と漢点字の普及をご支援下さっておられる皆様のご来席をお待ち申し上げます。

日時：二〇〇八年一月二〇日（日）

一三・三〇・一五・三〇

会場：ワシントンホテル桜木町

（JR、横浜市営地下鉄・桜木町駅下車）

五F レストラン・ベイサイド

費用：五、〇〇〇円

編集後記

▼ワープロやパソコンで使われる「カナ漢字変換装置」を發明した

大手電機メーカーの元技術者が、会社に發明対価として莫大な金額を求める訴訟を起こしたというニュースが報じられました。その訴訟の妥当性は別として、かな入力した一連の日本語文章を漢字に変換するには、かなり高度な文章解析が必要となります。

▼日本語は他言語に比して「同音異義語」が極端に多い言語だと思われれます。その原因は、比較的単純な表音文字（カナ）と、豊富な漢字の組み合わせで文章が組み立てられているためだと思われれます。逆にいうと、漢字がなくては文章表現が成り立たないということです▼話し言葉の中では、かなりの部分の同音異義語は、前後の文章の流れから推察がつくものですが、それがむずかしい場合はいちいち漢字を別に読み替えた説明を付け加えたりします。そういう煩わしさを避けたいのが文学的表現で、特に俳句などは、作者が表現したい微妙なニュアンスは絶対に漢字を使わなくては本来の意図が表現できないでしょう。そういう作品を自分の力で理解したいと考える視覚障害者にとって、漢点字の存在が如何に大切であるかが推察されます。（木下和久）

E-MAIL（岡田健嗣）： okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL：http://ukanokai.web.infoseek.co.jp

《表紙絵 岡 稲子》

次の発行は2月15日です。

※本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。